

侵攻—普遍主義を問い直そう

写真は朝日 6 月 5 日「西谷修・東京外国語大学名誉教授に聞く」。途中までと最後を紹介する。

2 月 24 日。ロシアのウクライナ侵攻の衝撃は大きかった。世界大戦につながりかねないという危機感、そして歴史に学ばない人間存在への落胆と怒りである。



20 世紀、人類は二つの大戦によって、ホロコーストや原爆投下などの悲劇を経験した。反戦、いやもはや「非戦」を掲げることにしか残された道はない、と決意したのではなかったか。ウクライナ侵攻から 3 カ月が過ぎ、危機感と無念さは増すばかりだ。長期戦も予測される中、ひたすら積み上げられていくのは無辜の市民の犠牲である。

戦争は、人間の生存すべての次元を巻き込む。平穏な日常を根こそぎ奪う。個人はいや応なく動員されてしまう。個人的にどんな人間関係を築いていようと、敵味方の分断を強制される。強制されるばかりでなく、個人は国家や民族に統合されることに高揚し、自ら戦争協力することもある。

つまり国家という主体が強力に立ち上がり、勝利という単一の目的に向けた支配秩序が形成されるのが戦争だ。全体の個に対する、圧倒的な勝利を示す出来事といえる。

他方、戦争はまた、我々の思考の限界や破綻をあらわにする場でもある。平時なら目を背けてきた、人間のおぞましい本性を引きずり出しもする。

我々の生きる世界を初めて一元化させた先の二つの大戦で重要なのは、科学が進歩した時代の、分別ある合理的世界の果てに起きたカタストロフィーだった点だろう。人類の叡智である文明の先に、野蛮が待ち受ける。理性の無力さが立ちはだかる。その冷酷な事実が突きつけられたのだ。

だから戦争について真摯に考えるならば、近代社会を支えてきた自由や主体の概念まで、とらえ直さざるをえない。合理的な世界「にもかかわらず」、なぜ戦争は起こるのか。陰惨な行為に手を染めるのか。全体性を根源から直視しなければならないと思う。

その意味で、いまウクライナで起きている現実も、表面だけ見ているには理解に至らない。もちろん発端はロシアの国際法違反だ。でもなぜ、こうした行為に走ったか。冷戦後の国際秩序再編の中で排除され、歴史的にも西欧世界の辺境に置かれた事情などを一考する余地はあるはずだ。

親ロシアではない。世界の言論空間があまりにも「反ロシア」一色の現状に疑問を抱くだけだ。哲学的に言えば、普遍主義への懐疑ということになる。

急ぐべきは戦争を一刻も早く止めることだ。唯一立てられる価値は「殺し合いをやめ、みんなが死なないこと」、これだけである。

(2022 年 6 月 8 日)